

(新資料)角倉素庵書写の観世流謡本『三井寺』切

林 進

1 素庵「かな書体」の基準例

江戸時代初期、京都の豪商で儒学者でもあった角倉素庵（通称与一、1571～1632）は当時、能書、すなわち筆法に秀でた人と見られていた。素庵がもっとも得意としたのは、中国の書法で、楷書、行書、草書を自在に行った。その確かな書跡が遺されている。一方、彼は、かな書にも優れ、日本の古歌や古典文学書を書写することで、明快で優美な「かな書体」を確立させた。この新しい「素庵かな書体」は、古活字版（嗟峨本）のための木活字（全角・二倍角・三倍角・四倍角）の字母になった。

素庵は人の求めに応じて、快く和歌や漢詩を巻物や色紙や短冊に揮毫して与えた。古歌を染筆するとき、古来の書式に従い、作品に自署・

捺印することは無かった。そのため、素庵の書跡の多くは、後世、本阿弥光悦（1558～1637）の落款（花押）が記され、また「光悦」黒文方印が捺されて、「光悦」の書として伝えられた。

近年、素庵の「かな書体」の基準作品が発見された。『新古今集和歌短冊<世にふるは>』（図1）がそれである（個人蔵）。本紙は雁皮紙、縦36.0cm、横5.7cm。金銀泥肉筆で葦の生えた水辺の情景が下絵として描かれている。伝統的な装飾料紙である。その上に、二條院讃岐の和歌「世にふるはくるしきものを楨の屋に やすくもすくる初時雨かな」がたっぷりとした墨で揮毫されている。起筆において尖筆が左上から鋭く入り、漢字は太く、かな文字は極端に細く、抑揚に変化をつけ、律動的な流れを見せ、装飾性豊かな筆跡である。親しみのある書体である。本紙は合剥ぎされているが、さいわい、かつて本紙裏面に依頼者が書き込んだ揮毫者名「角蔵与一殿」の裏書は切取られて、短冊裏面（裏打ちなし）の右下隅に貼られている（図2）。この裏書は、短冊の揮毫者が素庵であることを証明する。「角蔵」と書くのは、慶長12年（1607）以前といわれているので（『板倉政要補遺』巻四、慶長12年の頃）、この短冊は慶長10年前後のものと思われる。



図1 素庵筆「和歌短冊」



図2 同短冊の裏書

2 慶長11年、観世黒雪奥書の謡本『藍染川』

素庵書『新古今集和歌短冊<世にふるは>』の「かな書体」は、慶長11年（1606）、観世流九世・観世黒雪（1566～1626）の奥書がある謡本『藍染川』一帖（図3、縦24.9cm、横17.7cm、大和文華館蔵）の「かな書体」と共通する。本文は素庵の筆になるものと考えられる。本文末尾に「慶長十一年五月廿七日 観世左近大夫 身愛（花押） 後藤庄三（郎）様 右五拾ハンノ内」とあり、黒雪が節付けして、金座、伏見・銀座を差配した豪商、後藤庄三郎（1571～1625）に進呈した五十番の揃い本（「後藤本」と称される）のうちの一つである。他に後藤

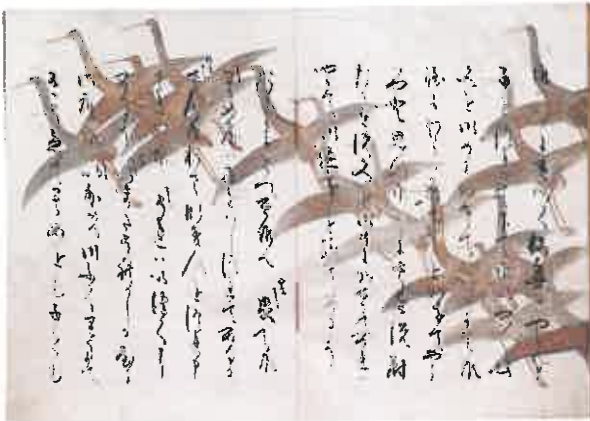


図3 観世流謡本『藍染川』素庵書写

本「放生川」「昭君」「松山鏡」「鶴羽(うのは)」「鍾馗」の五帖(個人蔵)が知られている。この後藤本は綴葉装で、表紙は肉筆の金銀泥絵「藤萩図」、本文は金銀泥肉筆下絵と木版雲母刷下絵(その上に金銀泥絵を描き加えるものもある)とを交互に重ねた色替りの具引き料紙に筆写されている。『藍染川』の金銀泥肉筆下絵の「鶴図」(図3)は、有名な重要文化財『金銀泥鶴図下絵・三十六歌仙和歌巻』(京都国立博物館蔵)の肉筆「鶴図」(俵屋宗達筆)と図様・描法が同じであり、また後藤本装飾料紙の銀泥肉筆「胡蝶図」と京都国立博物館本の紙背に施された銀泥肉筆「胡蝶図」とはまったく同じである。そうすると、後藤本の下絵は俵屋宗達の筆になるものである。なお、京都国立博物館本の巻末に「光悦」黒文方印が捺されているが、これは後印と考えられる。その和歌の書体は光悦ではなく、素庵の書体の特徴を示している。

3 新出の謡本『三井寺』切

平成19年、京都市内の古典籍舗に出現した鈔写謡本『三井寺』の断簡「として鐘撞可、……明月に向て、心を」は初見、後藤本切かと思われた(図4、個人蔵)。具引き料紙(雁皮紙)を合剥ぎした半丁分の断片で、他に例のない珍しい金銀泥肉筆「蘭図」の下絵がある。それは後藤本『藍染川』の金銀泥肉筆下絵「薄図」と同一の流麗な筆致を示す。新出切も俵屋宗達の筆になるものと思われる。本文は後藤本と同じく七行書きで丁寧に書写され、その「かな書体」は『藍染川』の書体とまったく同じである。すなわち、謡本『三井寺』もまた素

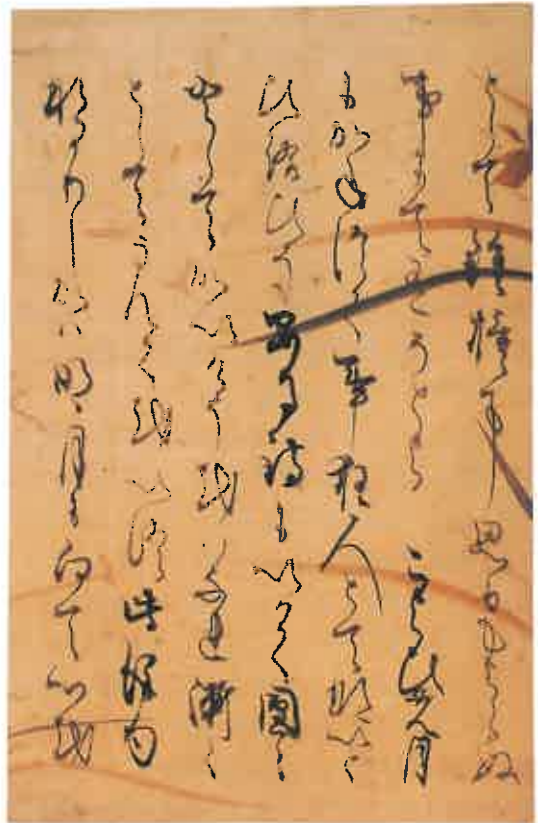


図4 謡本『三井寺』切 素庵書写

庵が筆写したものである。染筆時期は後藤本と同じ慶長11年頃と思われる。なお「角倉素庵」の古筆極札が付けられている。

この『三井寺』切と後藤本『藍染川』とを見比べると、本紙半丁の法量が異なり(本切21.6×14.3cm、後藤本24.9×17.7cm)、また墨付きの大きさも異なる(本切18.5×12.0cm、後藤本19.0×13.6cm)。そうすると、当該謡本は後藤本と異なる別の揃い本の一帖と考えられる。慶長11年奥書の後藤本より以前に書写された第一期後藤本(上演が多い五十番)の存在が想定される。『藍染川』などの後藤本(上演が少ない五十番)は、第二期の揃い本ということになる。そのことは、すでに表章氏が予想されておられた(『図説光悦謡本』)。

慶長末・元和初年頃にも、江戸幕府の要人、土井利勝(大炊介、1573~1644)の依頼で、素庵が謡本(揃い本)を書写し、黒雪が節付けしたことが、『観世黒雪宛素庵書状』(センチューリ美術館蔵)によってわかる。素庵は、人から求められて、たびたび観世流謡本を書写しているのである。

関西大学非常勤講師